

恋人はスナイパー <偽りと隠された真実>

作:ウッチャン大好きっ子

\* < > で閉じられている会話は、中国語での会話になります。

新キャラ

1. 日神 陽一(ひかみ よういち)・・・死の(龍冴の指揮する)部門のメンバー。
2. 氷月 誠也(ひょうげつ せいや)・・・死の部門のメンバー。日神とはコンビを組んでいる。
3. 金原 美星(かねはら びせい)・・・上記の二人と同じ死の部門のメンバー。
4. 炎崎 京子(えんざき きょうこ)・・・上記の三人と同じ死の部門のメンバーで平原とはコンビを組んでいる。

### 解説 (既に存在する言葉について)

1. スナイパーズ・ネスト・・・狙撃発砲地点の事

### 解説 (私が作ったオリジナルの言葉について)

1. ガーディアン・・・死の部門の1つであり、要人警護など警護業務を専門に行なっている者達。  
身を持って対象者を守る。銃弾の前に身を投じる精神力、丈夫さを持つ。  
射撃、武術など様々な事に熟知している。  
武術も独特の”守りの武術”を使う。
2. スターコード・・・”ガーディアン”の中で最高位の者(上位 10 人)に与えられる称号。  
年齢、”ガーディアン”歴に関係無く実力主義で決められている。  
使徒(リーダー)である龍冴の直接試験を通ったエリートである。  
通常上から2名ずつコンビを組んで行動する。(入れ替えもあります)  
太陽系の星の並びに例えられている。  
”Earth(地球)”を守る対象者とし、地球から近い(影響力がある)程、上位の者である。  
1. Sun(太陽) 2. Moon(月) 3. Venus(金星) 4. Mars(火星)  
5. Mercury(水星) 6. Jupiter(木星) 7. Saturn(土星) 8. Uranus(天王星)  
9. Neptune(海王星) 10. Pluto(冥王星) となります。  
(太陽と月は通常太陽系の恒星に入れませんが数合わせです。)

~ 第82章 ~ < 師弟 >

- 朝4時 -

凱歌は結局浅い眠りについたものの、この4日間で早起きの習慣がついてしまったらしく目が覚めてしまい”武道場1”に居た。そこで一人静かに型の練習をしていた。

- 朝5時 -

きなこは凱歌同様に5時に起きる習慣がついてしまったらしく、仕方が無く歩き回っているといつのまにか”武道場”のある階に居た。

『暇だし、練習して汗でもかくかな。』ときなこが”武道場”に近づくと誰かがいる事に気が付いた。

慌てて構えるとそこには蒼凱が”武道場1”を覗いていた。

「何してるんですか？」ときなこが話し掛けると、蒼凱は驚いて振り返るも室内を指差した。

見るとそこには凱歌が一人”詠春刀”を手に型の練習をしていた。

それはまるで舞いを見ている様に美しい流れるような動きだった。

二人は室内に気付かれぬ様に入っていった。

暫し見惚れていると、凱歌が一連の流れを終え刀を鞘にしまった。

蒼凱が拍手をしたのできなこも一緒に拍手をした。

二人に全く気が付いていなかった凱歌は驚いてしまった。

「驚かせて済まない。でもあまりにも美しかったんでね。そこまで整っていると舞いの様だ。

見世物に出来るよ。」と蒼凱は言った。

「本当に綺麗だった。私見惚れちゃったもん。」ときなこも言った。

凱歌は照れてしまった。

「朝っぱらから何やってんだ～。ハァ～。」と龍牙があくびをしながら入ってきた。

全員が振り返って見るので龍牙はばつの悪そうに笑った。

「二人とも早起きが見についちゃったみたいだな。折角だから蒼凱に相手をしてもらえばいい。

蒼凱が俺達の中で唯一普通でありながら実力者だ。俺直伝の槍術のみで俺と遣り合う奴だ。

それにはっきり言うと蒼凱は俺の弟子みたいなもんだ。」と龍牙が壁に寄り掛かる様に座りながら言った。

「そんな龍牙さんと遣り合うなんて…。確かに僕は龍牙さんから直接武術、槍術を習いましたが…。いつも手加減してもらってるじゃないですか。」と蒼凱が慌てて否定した。

「へえ～。蒼凱さんって龍牙さんの弟子なんだ。」ときなこが言った。

「ええ。一応ですけどね。

僕がここに来たばかりの時は何も出来なくて自分の身も守れない子供でしたから。

そこで龍牙さんから徹底的に武術と、子供でも戦いやすい槍を教えてもらったんです。」と蒼凱が懐かしそうに語った。

「あの時の蒼凱は本当にもやみたいなお子供だったからな。

それが今じゃこの身長に立派な体型…。

こんなに身長が高くなると分かっていたら槍術なんて教えなかったのにさ。」と龍牙も懐かしそうに語った。

「でも僕は槍術を教えてもらってる間は死ぬかと思いましたよ。というか死んだ方がマシだと思いました。子供の僕に容赦が無いんですから…。

今思えばそのお陰でどんな事も苦だと思いませんし、自分の身も人も守れる力を手に出来たんですから感謝してます。」と蒼凱が言った。

「何か照れるな～。あの時は自分の身は自分で守らせるしかなかったからな。

だから俺はやるなら徹底的にやった。それをお前は耐え、更に強さを求めた。

それはお前の力であり、良い所だ。」と龍牙が優しく言った。

「そういえばまだ二人の鍛錬に立ち会ってないんですよ？」と蒼凱が訊く。

「ああ。休みが明けたら今度は俺が二人を徹底的に鍛える。蒼凱の時以上にな。」と龍牙が意味深に言う。その言葉に蒼凱は二人を見て”ご愁傷様です。”という感じの表情をした。

二人はその表情にその鍛錬の厳しさを想像した。

「と言うのは冗談だ。そんなに厳しくやったら死んじゃうよ。

蒼凱の時でさえ、死んだらそれまでの感覚だったんだから、それ以上なら死ぬほか無いでしょ。」

と暢気に龍冴は言った。

「死んだらそれまでって…。そんな事を僕の時は考えていたんですか！」と蒼凱が言う。「うん！」と

龍冴があっさりとした。そのあっさり加減に蒼凱は言葉を失ってしまった。

「でもまあ…。龍冴さんの鍛錬はプロフェッサーや天山さんと比べたら天と地、いやそれ以上違います。

僕は二人の鍛錬を見てきましたし、龍冴さんの鍛錬を受けた者として断言します。

下手をすると死にます。でもそれだけ実戦的な事しか教えません。」と蒼凱は真剣な顔で言った。

「確かに俺は実戦的という最小限必要な事を、最大限発揮出来る様に教える。

俺は実戦の中で武術、戦術などあらゆる事を身に付けているからな。

それじゃあ蒼凱、久しぶりに一戦やるか。」と龍冴が立ち上がり棍を投げ渡した。

「えっ！僕とですか？」と蒼凱が槍を受け取り訊く。「どれだけ強くなったか見せてもらおう。心配するな、

気は使わない。」と龍冴も棍を手にした。

そんな事で師弟対決になってしまった。

龍冴は蒼凱に”こい”と手招きした。

それに蒼凱は乗り、素早く棍を繰り出す。龍冴はその突き出される棍を必要最小限の動きで避けて

行く。しかし、見ている二人にはそれが有り得ない様に思えた。

蒼凱の突きの早さは数十本もの残像が残るほどの物だった。

それを何の苦も無く交わしながら鋭く的確な突きを繰り出してくるのである。

蒼凱の方が身長がある分、リーチが長いので攻撃する方が大変であるが、龍冴にとってそれは

何の問題もない。その時、蒼凱の攻撃の流れが変わった。

先程までは一方的に押す感じが、相手の攻撃を誘う格好に変わった。龍冴はそれに乗る格好で

打ち込んで来た。それを弾きながら、リズム良く斬り込んで来た。その動きに龍冴の口元が緩んだのに

凱歌は気が付いた。

『笑った…。龍冴さんは蒼凱さんの成長を喜んでいる。それにこの戦いを楽しんでいる。』と凱歌は

思った。確かに龍冴は凱歌の思った通り喜び楽しんでいた。

しかし、そこは師匠であり、戦いである。負けるわけにはいかない。

その内に二人の棍は計算された様に一歩も引かない打ち合いになった。それはいつもまにか”舞い”

と化していた。それを見ている内に室内にいる人の気配が増えている事に二人は気付いた。

振り返るとプロフェッサーと天山が離れた入り口の所に立っていた。

天山は二人が気付いたのをみて、片手を挙げた。プロフェッサーはじっと”舞い”を見ていた。

天山は二人の元に来るやこんな事を言った。

「こうして二人が組み手をするのは約5年ぶりだと思いますよ。

師弟関係にある二人は必要以外は決してやらないんです。

というか蒼凱がやりたがらないんです。それを龍冴が平均4年から5年周期で試すんですよ。

今回丁度時期が良いんです。それにしても蒼凱、また上手くなっている…。」と天山が言った。

そんな話をしていると龍冴と蒼凱の”舞い”は佳境に入り、龍冴は本気に打ち込み始めた。

蒼凱もそれについて凱歌ときながが見た事も無い獲物を狙う鷹の様な鋭く厳しい表情をしていた。

そしてやはり師匠は圧倒的だった…。蒼凱の普通では分からないような一瞬の際を突き棍を

弾き飛ばした。互いに礼をして振り返ると観客の人数が増えている事に二人とも驚いた。  
「何でお前ら居るんだよ！」と龍冴が言うと「朝からこんな珍しいものを見ないわけないじゃろうが。」とプロフェッサーが答えた。その言葉に固まってしまった。  
「まあいいや。蒼凱、また強くなったな。この調子で頑張れ。次はまた5年後ぐらいかな。」と龍冴は蒼凱の肩を叩きながら言った。  
「さて、朝食にして出かける準備をしますか。」と龍冴が言い、棍をしまい部屋を出ていった。

~ 第83章 ~ < 準備 >

それから朝食を終え、一旦自室に戻り着替えを済ませミーティングルームに再度集まった。  
龍冴が最後に部屋に入ってきた。  
「それじゃあ説明する。  
これから出かける為の準備をする。凱歌は、天山から変装を施してもらう事。  
その後、蒼凱が二人を外に連れ出す。俺も用があって出かける。  
市江さん、紅龍には連絡を入れておくから。  
それからは自由に過ごしてもらって構わない。  
明日の朝10時に紅龍に向かいに行く。それまで楽しむといい。」と龍冴が言った。  
「それでは凱歌来て下さい。教えますから。」と天山は凱歌を連れ部屋を出て行った。  
「きなこさん、凱歌が帰ってきたらビックリしますよ。  
天山さんの変装の完成度はとんでもないですから。  
大した道具も使わず、一般的な化粧品だけで別人にしちゃいますからね。  
でも多分今回は簡単に変装用具を使うと思いますけどね。」と蒼凱も楽しみな様で笑顔で言った。

- 10分後 -

天山が部屋に戻ってきたが凱歌がなかなか入ってこなかった。  
「凱歌、早くしないと出かける時間が無くなりますよ。諦めて入ってきなさい。」と天山が扉を見ながら言った。すると顔を隠す様にフードを被り俯いて入ってきた。  
龍冴は天山を見ると俯く凱歌を見た。  
「凱歌、複雑な気持ちも、恥ずかしいのも、分からんでも無いけど早く俺達に見せてくれよ。」と龍冴が言った。恥ずかしそうに凱歌がフードを外し顔を上げた。  
そこにいた凱歌は雰囲気は全く変わっていた。  
その顔にはいい人に見える要素が全て無くなっていた。  
まず大きく変わっていたのは髪の色が黒から茶色に変わり、瞳の色が黒から薄い金色になっていた。更に顔は下がっていた目じりが上がり、鋭い目つきになり、頬骨が出ていた。  
上がっていた口角が下がり、鼻の左右から口角まで伸びた皺が無くなっていた。  
そして左耳には十字架のイヤリング、胸には金のネックレス、両手の指にはシルバーの指輪が光っていた。  
「今回は簡単に取り外しのきくものとの要望がありましたから、本格的な事はやりませんでした。  
髪色ですが、これは洗うと簡単に落ちますし、瞳も特殊な薬で変えてますが半日ほどしか効きません。目じりなども特殊なパーツを薬で付ける方法を使いましたので、取り外しも簡単です。  
あとは雰囲気を変える為にアクセサリーを付けました。

こんなもんですがどうですか？本当はもっとやるなら本格的にやったんですが…。」と天山は少し不服そうに言った。

「不服そうだけど大分本格的だと思うんだけど…。」

まっこれでとりあえずいいとして天山、きなこさんに。」と龍冴はきなこを天山に押し出した。

「分かりました。きなこさんちょっと来て下さい。」と天山は笑顔で手招きをして部屋の外に連れ出した。

「心配するな。すぐ来るからさ。」と龍冴は妙に楽しそうな顔で凱歌を見て言った。

- 5分後 -

天山が再び先に部屋に戻ってきた。

「凱歌そして皆さんご覧下さい。」と天山が扉から退くと清楚な感じに変わったきなこが現れた。

その服装、メイクはきなこの良さを引き立てていたが、本人は恥ずかしがっていた。

凱歌は今までに見た事のないそのきなこの美しさに固まってしまった。

「馬子にも衣装じゃな。」とプロフェッサーは一言言った。その瞬間龍冴の拳が降ってきた。

「こうなるとますます不似合いなカップルだな…。」

男は不良みたいだし、女はお嬢様みたいだし…。」と龍冴は頭を抱えた。

「それもいいんじゃないですか。」

そんな反対の感じのカップルだって結構いますから。」と蒼凱が言う。

そうは言ったものの二人が並ぶと確かに美女と恐い男の正反対の雰囲気から目立ってしまう。

しかし時間も無いのでそのまま行く事にした。とりあえず凱歌と分からなければいいのである。

~ 第84章 ~ < 出発 >

- 入り口・朝8時 -

二人は互いの姿に動揺しながら入り口に向かった。

龍冴は大型バイクに乗り、入り口で待つ二人の前に現れた。

「二人は蒼凱の車で東京駅まで送る。忍冬は蒼凱に預けてある。それじゃあ俺は先に出かけるが明日の朝迎えに行くよ。」と龍冴がヘルメットのシールドを下げながら言った。

そしてエンジンを吹かし二人に手を振ると走り出した。

「じゃあ僕達も行きましょうか。それとこれは龍冴さんからです。」と蒼凱は忍冬の苗と封筒が入った袋を二人に渡した。封筒には、現金10万円と手紙が入っていた。

- 手紙の内容 -

”凱歌&きなこさんへ

本当は直接話すべきなんだが、説明しづらいので手紙にした。

まず二人をこんなとんでもない作戦に巻き込んでしまってすまない。

その罪滅ぼしも実は兼ねている。こんな事しか出来なくてすまない。

現金は二人のデート代にしてくれ。

もちろんこれは俺が正当な方法で稼いだお金からのプレゼントだから気がね無く使ってくれ。

俺にはお金を使う習慣のようなものが、ほとんどないんで、どれくらいいるか分からなかったから適当に入れといた。忍冬も天山に選んでもらった奴だから、とてもいい物だと思う。

二人とも今日1日たっぷり楽しんでくれ。”と、とても綺麗な字で書かれていた。

- 入り口 -

「珍しいですね。龍冴さんが手紙を書くなんて。

龍冴さん、自分にあまりにも不似合いな字だからあんまり直筆で手紙を書かないんです。

これでもかなり雑に書いている方だと思いますよ。」と蒼凱が手紙を読んでいる二人に言った。

二人は確かにあまりにも整い見本のような字に納得してしまった。そしてこれでも雑に書いている事に驚いた。

そうこうしている間に蒼凱は車を用意し、二人を後部席に乗せた。

「それじゃあ、出発します。」と蒼凱は言うのと静かに車を発進させた。

蒼凱の運転はとても丁寧で最高の乗り心地だった。

「そう言えばお二人に確認しておきますが、市江さんとの面会時間が午後からです。

それとお二人に連絡用のインカムを念の為に一つ渡しておきます。

我々から大変な事がない限りは連絡はしませんが、何かお二人が我々に連絡を取りたいに使うて下さい。」と蒼凱は出発してすぐに思い出した様に言った。

長い地下道を抜けると、”日本武道館”そばの道に出た。その入り口は隠されていた。

二人はあの地下施設がどこに有るのか、連れてこられた時はお互いに意識がハッキリとしていないだったので正確な場所を知らなかった。

「お二人共地下施設がどこに有るか知りたいとは思わないんですか？」と蒼凱が訊いた。

二人は驚きつつ、「別に。」と答えた。

内心は知りたいとは思ったが、知ったら日本の裏側を見てしまう様で恐かった。

「そうですか。でもこれだけは言うておきます。平和ボケしていると言われるこの日本は世界一平和ボケしていない。そして最高意志決定機関は今なお昔と変わってはいない。

そんな日本の最高意思決定機関と我々は深く繋がっています。」と蒼凱は真面目な口調で言った。それからは今日1日の予定を凱歌ときなこが話し合っていた。それを蒼凱は聞きながらも、運転に集中した。

~ 第85章 ~ < 東京案内 >

- 東京駅 -

到着すると蒼凱は二人を降ろすと、インカムをきなこに渡すと「それじゃあお二人共楽しんで。」と言い車を発進させた。

「行こう。」ときなこに引っ張られて切符売場に向かった。

きなこは凱歌の分も切符を買って電車に乗り込んだ。

凱歌はきなこに言われるままだった。

実は車の中できなこは凱歌に何をしたいか訊いたが、「きなこさんに任せる。」と言うだけだった。

そこできなこは凱歌の正体を知る前に嘘東京案内をした事があったので今度は本当に東京案内をする事にしたが凱歌には教えていなかった。

まず定番の東京タワーを見に行く事にした。

しかし向かう電車の中でこの異色の二人は人々の注目を予想通り集めてしまった。

二人は初めこそ気にしていたが、それを気にしない事にした。

自分達が気にしなければ他人の視線など何ともなくなる。

それでも女性に免疫のない凱歌は内心どきどきの連続だった。

電車を降り東京タワーの真下に来て、凱歌は上を見上げているときなこが「展望台行こう。」とズンズン引っ張っていた。

そして展望台に着くや「私初めて来た。」ときなこは言い、凱歌よりもはしゃいでいた。

凱歌はきなこのそのはしゃぎっぷりに笑顔を浮かべた。

その時外の景色を見た瞬間、ライフルのスコップを覗いている時の記憶がよぎった。

それを振り切る様に首を左右に振った。

「ホイさんどうしたの。早く早く！」ときなこの声が聞こえ、「はい。」と答え何もなかったかのような顔できなこの元に凱歌は向かった。

きなこは凱歌に望遠鏡で色々な所を見ながら簡単に説明していった。

「意外と面白かったね。東京タワーってこんな事がないと来ないから。

それじゃあ今度は新しい名所に行こう。」と再び駅に向かった。

凱歌はきなこの笑顔を見ているだけで幸せだった。この笑顔があったら何もいらなかった。

次に六本木ヒルズに向かった。

「ここがつい最近オープンした所。様々なお店があるんだって。」とここもあんまり来た事がない感じできなこが説明した。

きなこ途中で手に入れた地図を片手に見て回っていると凱歌は鋭い視線を感じた。

振り返るがそれらしい人は見当たらなかった。きなこも気がついていられるらしく、そっと聞くが首を横に振った。心配しつつも案内を続けた。

時間的に昼食時間だったのでレストランで食事を取った。

流石にきなこもこれから市江に会いに行くのでお酒は我慢した。

こうして二人で食事をするのはきなこがピアノの腕を見せた時以来だった。

この頃にはお互いに緊張や恥ずかしさがなくなり本当の恋人同士の様になっていた。

食事を終えると市江の入院する病院に向かった。

~ 第86章 ~ < 再会 >

- 病院・昼2時 -

病院に着き、病室を看護師に、きなこが聞きに入っている間に、凱歌は変装を取る準備をしていた。特別な薬が付いている為、取るには薬を塗らなければならないのである。

きなこが聞いて戻ってきた。その後ろには医者と看護師がいた。

「初めまして。私は龍冴様より市江様の警護並び担当医をしております生の部門の渡辺です。

こっちは同じ生の部門の渋谷です。他にあと医師で田澤と看護師で高沢、川西の5名が医師、看護師として付いています。それ以外に警備員が準じ入り口に1名付いています。」と渡辺と名乗る医師が凱歌と握手をしながら説明した。

その後ろで田澤という看護師が頭を下げた。

両者とも生の部門の者である証である透明な宝石が付いたアクセサリーを見せた。

凱歌ときなこは龍冴から一応市江の警護を兼ねて部下が付いている事は聞いていたが、これほどとは思わなかった。

見た目二人とも至って普通な感じであるが二人の前でありながら隙が全くなかった。

凱歌はきなこ渡辺、田澤に言い、変装を外しに行った。

凱歌が変装を外して戻ってくると、入り口で警備員に渡辺が話をし、二人を個室に入れた。

その時少し行った所の曲がり角から四人の様子を見る者がいたが、凱歌ときなこは気が付かなかった。

室内には市江がベットの枕側を上げ横になっていた体をこちらに向けた。

「市江さん、息子さんがお見舞いに来ましたよ。誰も入れない様にしましたので安心して下さい。

それでは帰る際に少しお話がありますので私の元に来て下さい。」と最後だけ二人しかに聞こえない様に言い渡辺と田澤は出ていった。

「母さん。」「凱歌。」とお互いに抱き合った。

その光景を静かにきなこは見ていた。

それから凱歌は「母さん、体はどう？」と心配そうに訊き、龍冴に用意してもらった忍冬を渡した。

「これ…。忍冬。ありがとう。懐かしい。父さんを思い出すわ。

もう少ししたら退院出来るそうよ。退院したら円道寺さんの所で働かせてもらう事になっているの。」と市江は言った。

凱歌は一瞬市江が父の話をした時に顔が曇ったがすぐに安心した様でその場にあった椅子に座った。

きなこも挨拶をすると凱歌の隣に椅子を用意して座った。

そして説明が許された限りで今の状態を説明する事にした。

「今僕達は、ある機関と協力して1211の事件解決に協力しているんだ。

それが僕に出来る唯一の罪滅ぼしなんだ…。」と凱歌は説明した。

「でも、心配しないで下さい。いざとなったら私が守りますから！」ときなこは胸を叩きながら言った。

「守るのは僕だ！」と凱歌が剥きになって言った。

その言い合ってる姿に市江は笑ってしまった。その声に二人は市江を見た。

「ごめんなさい。でもとってもお似合いです。」と嬉しそうに市江は言った。

その言葉に二人は言い合いをやめ、互いに赤面して俯いてしまった。

またその姿に市江は「凱歌も円道寺さんも好きなのね。でも、まだ恥ずかしいなんて。」と微笑ましく思った。それから別れてからの事をお互いの事を順々に話していった。

しかし、凱歌が操られて市江を殺そうとした事だけは言えなかった。

そして、時間はあっという間に流れて夕方5時となった。

渡辺が話があると言っていた事もあったので帰る事にした。

市江に二人は別れを言い、部屋を出た。しかし凱歌はやはり別れは辛かった。

そして渡辺はカンファレンス室に案内した。

凱歌は何を聞かせるか心配で暗い表情になっていた。

「一応市江様の病状説明と今後の治療について説明を致します。なのでそんなに心配しなくていいですよ。市江様は心臓に疾患がありますが、これは安静にしていれば良くなりますので心配は要りません。今後は疾患の状態を見ながら退院の時期を計るだけです。

早ければ1ヶ月ほど、長くても3ヶ月で退院出来ると思います。

ただやはり強いストレス、不安などは良くないので、そのような事はなるべく避けて頂きたい。

つまりそのような事を伝えるような結果にならない様にして頂きたいのです。」と渡辺は言った。

それは殲滅作戦で死ぬような事、悲しませる結果にならない様に釘を刺していた。

「もちろんそんな事にならない事は私達のリーダーである龍冴様、更に他の使徒の方が全員揃う万全の体制ですから心配はしてません。

ですが、四天王が揃うという事はそれだけ危険性があるという事です。

我々はただ医療技術を発展、使うだけではなく、命を狙われている病人を守るのも任務の一つとして

います。ですから、我々はただの医師や看護師ではありません。

龍牙様の指導の元、訓練を受け合格した者です。

ですからどうか市江様の事はご心配無くお進み下さい。」と渡辺はしっかりと声で言った。

そして凱歌は変装を行ない、きなこと共に病院を後にした。

病院を出て暫く歩いているときなこが突然言った。

「ねえ！私行きたい所があるんだけどいい？」ときなこが突然訊くと驚きつつ「いいよ。」と凱歌が答えた。

着いたのは海岸だった。そこからはレインボーブリッジが綺麗に見えていた。

夕方5時30分を過ぎ夕日が綺麗にレインボーブリッジを照らしていた。

凱歌ときなこは静かにその美しい景色を見ていると、きなこはそっと凱歌に寄り掛かった。

凱歌もそれに応じようとした時、凱歌は変装を解き、そっと左手をきなこの左肩に回した。

そのまま日が沈むのを静かに見ている。

そして日が沈んだのを見届けると、ライトアップされたレインボーブリッジをバックに二人はそっと唇を重ねた。それから少しして二人は浅草寺に向かった。

きなこの家のそばとはいえ、有名でありながら凱歌は行った事が無かったので、本堂までゆっくりと歩いて回った。

ここはもう小さい頃から庭のようなものだったのできなこは詳しかった。

それも終わり、思い出深い道を歩き紅龍の見える所まで来ると入り口の所に誰かが道を見ていた。それははなだった。はなは二人に気がついて店の中に引っ込むと雁太郎、美智、はな、更には牛田までが店の外に出て二人を迎えた。

全員が「お帰りなさい。」「ホイさんお帰り。」と声を掛けた。

二人は「ただいま。」と嬉しそうに言った。凱歌は特に。

雁太郎は挨拶が終わるのを見計らい「お前ら遅かったじゃないか。」と言った。

「ちょっとね。」ときなこが答え、「心配かけてすいません。」と凱歌は言った。

龍牙達から日が沈んだら変装を解いてもいいと言われていたので、レインボーブリッジから変装を外し、帽子を深々と被るだけにしていた。

そして二人が中に入ると、そこにはお寿司が用意されていた。

連絡を受けて雁太郎が用意していたのである。

皆で明るくわいわいと楽しく騒がしい夕食が始まった。

凱歌はわさび入りに悪戦苦闘してはいたもののこの幸せな時を楽しんでいた。

多少お酒が飲める様になった凱歌は雁太郎からのビールを少しずつではあったが飲んでいく。

それが嬉しかったのか更に雁太郎は上機嫌になった。それはきなこも同じで上機嫌だった。

しかし結局二人のお酒の量に付いていけず、凱歌はダウンしてしまった。

そうして夜は更けていった……。

～第87章～ < 龍牙の予感 >

- 翌日・朝5時 -

凱歌は頭痛と気持ち悪さで目を覚ました。完全に二日酔いだった。

しかし、あまり気にしていなかった。

それは龍牙から前に1度使った事がある”アルコール分解剤”の試作品ではある錠剤版を渡されて

いたのである。もちろんきなこの分もあったが凱歌に二人分渡されていた。

凱歌は薬を飲むか悩んでいた。しかし薬を渡す時の龍冴の言葉が気になっていた。

『何かあった時に対処出来なかったら困るからな…。』と明らかに何か起きる事を知っているような感じだった。凱歌は飲んでおく事にした。そして『きなこさんにも渡さないよ。』と着替えをすませ、きなこの部屋に向かった。

きなこも早く目が覚めていた。

しかも凱歌同様に二日酔いになっていたがそこは慣れているので素直に自らの非を認めていた。いい時間になるまでゴロゴロして時間を潰す事にした。

そんな時、凱歌の声が聞こえた。

きなこは慌てて服を整えると返事をし、部屋の中に入れた。

凱歌は寝巻き姿のきなこに少し動揺してしまったが、龍冴から薬をもらっておいた事と気になる龍冴の言葉を話した。きなこはそれを聞き、薬をもらうとその場で飲んだ。

効き目が出るまで注射とは異なり、30分程掛かるので凱歌もきなこも暫くは二日酔いを味わう事になる。凱歌は身支度が終わっていないきなこを置いて先に下に降りる事にした。

流石に時間が早いので誰も無いと思っていたが、階段を降りる内に人の気配を凱歌は感じた。そっと見るとそこには雁太郎が新聞を読んでいた。

凱歌はほっとして挨拶をすると雁太郎が隣に座る様に手招きした。

凱歌は言われるがまま静かに座った。

「ホイさん、今まで博士の所でどんな事してた？色々と搾られてたんだろう？」と新聞を読みながら雁太郎は小声で訊いてきた。

「はい。僕はプロフェッサーの元で。きなこさんは天山さんの元で鍛錬を受けてました。

4日間の鍛錬のラストとして、きなこさんと戦いました…。』と凱歌は話した。

「きなここと戦ったのか。それでどっちが勝ったんだ？」と雁太郎は凱歌を見て訊いた。

「えっ…。一応、僕が勝ちました。

でも出来ればきなこさんとはもう戦いたくないです…。』と凱歌は瞳に悲しげな光を宿して言った。

その凱歌の表情に本当にきなこへの思いが本物である事を強く感じた。

「でも、きなこさんは僕が必ず守ります。」と凱歌は言った。

その時、凱歌は自分を見る視線を感じ、窓を見た。しかし、そこには誰もいなかった。

凱歌は『何かあった時…。』という龍冴の表情が頭をよぎった。

『この視線はもしかすると…。』と雁太郎は考えていた。

実は雁太郎もその視線に気が付いてはいたが敢えて無視していた。

そんな時、きなこが上から降りてきた。

「どうしたの？」ときなこが訊くと「えっ…。いや別に…。』と凱歌は答えた。

「お父さん、何でこんなに早起きなの。」ときなこは訊いた。

「目が覚めてな。」と雁太郎は淡々と答えた。

そうして龍冴達の元に行ってから話をしていると、美智達が起きて来てきた。

そして朝食は久しぶりに凱歌が腕を振るう事になった。

きなこも凱歌の朝食作りを手伝う事にしたが、これが大変な事になってしまった。

きなこは料理がまるでダメだったのだ。凱歌に教えられながら手伝っていた。

その二人の姿に雁太郎を始めとする全員、微笑ましく見ていた。

はなは途中で二人を見に行くに危なっかしいきなこの包丁裁きにドキドキしてしまっただが、凱歌が手伝いに入り事無きを得ていた。

そんなこんなではあったが凱歌ときなこの共同作業による朝食が完成した。

家族団らんの朝食が始まった。朝食が終わり片付けを済ませて凱歌ときなこが食卓に戻ってくると、全員が周囲の変化に気が付いた。

#### - 紅龍の表 -

「”ムーン”から”サン”。”ジョーカー”に動きあり。」

「”サン”から”ムーン”。了解。こちらからも確認出来る。”ムーン”は表を頼む。」という無線のやり取りが行なわれていた。すると物陰から男が現れ、監視する様に紅龍の前の店の閉まっているシャッターに寄り掛かった。そんな時だった、紅龍の前の道に黒ずくめの怪しい男達5人が現れた。

その男達の前に先程現れた男が立ちはだかった。

<怪我したくなかったらそこを退け。>と黒ずくめの男達のリーダーらしき奴が言った。

<君達1211だね。悪いがそれは出来ない。円道寺の方々を守る義務が僕にはあるんでね。

君達の相手は僕です。>と余裕の笑みを浮かべながら流暢に言った。

<邪魔をするなら痛い目にあってもらうだけだ！王凱歌を連れ戻せ！かかれ！>とリーダーらしき男が命じた。

紅龍に入ろうとする男達を立ちはだかる男は軽々と男達を入りに近づけず立ちまわって行く。

#### - 紅龍の裏 -

こちらでも表同様に黒ずくめの男達と男が睨み合っていた。

<1211か。表裏に5人ずつ。その程度で凱歌様を連れていく気かな？

悪いが僕がそれを阻止させてもらうよ。

こっちも仕事なもんでね。怪我したくなかったら早々に退く事だ。>とこちらも余裕の笑みを浮かべながら流暢に言った。

<貴様一体…。しかしこっちも退く訳には行かないんでね。かかれ！>とこちらもリーダーらしい奴が指示を出した。男は向かって来る男達を軽々と薙ぎ払って行く。

#### - 室内 -

凱歌ときなこ、そして雁太郎達は表裏の殺意に似た複数の気配を感じ取った。

その時、2階で物音がした。

凱歌ときなこは顔見合わせるや同時に2階に向かった。そこには黒ずくめの男達が入ってきていた。凱歌ときなこは慌てて男達を外へと追いやった。

その時、外で黒ずくめの男達と戦っている男二人に気が付いた。

「”サン”！上にもいるぞ。そっちはどうなってる！」と表にいる男が3人を相手にしながら無線で話した。

「こっちはほとんど片付けた。いや…。このままだと中に侵入されるかもしれない。

応援が来ちまった。」と裏にいる男が5人の男達を気絶させ路地の奥から走ってくる大勢の男達を見ながら答えた。

「こっちも応援が来た。何とかボスが来るまで時間を稼ぐしかない。あと15分だ。」と男は左右を囲む20人近くの敵を見ながら言った。

凱歌ときなこは二人の男の様子を見ると、凱歌はきなこに家族を守る様に言った。

しかしその時、下から大きな物音と叫びが聞こえた。

きなこは急いで下に降りた。

そこには表裏で戦って防いでいた男の手を逃れ、侵入して来た男達とはな達が戦っていた。

はなは一瞬の隙を突かれ蹴り飛ばされた。とどめを食らわせようとした時、表で戦っていた男が助けに入った。駆け付けたきなこに男が話し掛けた。

「こいつらは1211です。目的は貴方様と凱歌様を連れ去る事です。ですから、気を付けて下さい。」と言った。「貴方は一体・・・。」ときなこが訊く。

「僕達は皆さんの味方ですので、安心して下さい。」と優しく答えながらも隙を一切与えず敵を薙ぎ払っていった。

「室内に侵入されたが、却って俺らとしてはやり易くなったかもしれないな。あれ、凱歌様は？」と裏で戦っていた男も室内に侵入していた男達を薙ぎ払いながらきなこ達に近づいてきた。

「そういえば・・・。2階に居るみたいですね。”ムーン”、凱歌様をお願いします。」ときなこに初めに近づいた男が言った。

きなこは何も言っていない、見てもいなかったのにホイの居所をまるで気配を読む様に当てた男を驚いて見た。

「分かったが、本当にここを任せていいのか？これだけの大人数を。」を全く心配していない声で”ムーン”と呼ばれた男は言った。

「ええ、問題ありません。

この程度の相手でしたら僕1人で”ムーン”が凱歌様を連れてくるまで4人を守る事くらいお安いで用です。」と訊かれた男はこの状況で笑顔を浮かべて答えた。

それを確認するや”ムーン”という男が「失礼します。」と言い、階段を駆け上がっていった。

- 2階 -

凱歌はきなこが降りてから、侵入しようとする男達と戦っていた。

プロフェッサーから習った気功術を駆使して戦っていたが、あまりにも四方八方から入って来るので対応しきれなくなっていた。

そんな時1階から走り込んでくる気配を感じたが、それがきなこのものでない事も感じ、警戒し振り返った。その上がってきた男は、凱歌に見抜きもせず、入ってこようとしている男達をあっという間に蹴散らしていった。

<無事な様ですね。安心して下さい。俺は貴方様の味方です。

この状況のままでは不利になるばかりです。ここは俺が引き受けますので、きなこ様の所に行ってください。>と男は流暢に凱歌に言った。

凱歌はこの男を信用しきれなかったが、この有利な状況で1211が騙し討ちをするとは思えなかった。そして2階がこんな状態なのだから1階がどうなっているかは予想がつく。

凱歌は男にこの場を預け1階に向かう決心をすると、男に頷いて見せた。

男はそれに答える様に笑顔を見せ、行く様に首を振った。

凱歌は1階に駆け下りていった。

<さて、凱歌様が”サン”の所に行った事だし、俺も君達を叩きのめして合流しないといけないんでね。久しぶりに本気を出させてもらおうよ。>と”ムーン”は男達に言った。

- 1階 -

凱歌が駆け付けるとそこには、きなこと共に家族を守る様に戦う見知らぬ男が居た。

<ご無事で何よりです。すみませんが”ムーン”が帰ってくるまで手伝ってもらえますか？>と”サン”と呼ばれた男が流暢に敵を薙ぎ払いながら凱歌に言った。

言われるも無く凱歌は敵を倒しながらきなこ達に近づいて行った。

三人が敵と戦っていると”ムーン”の無線から声が聞こえた。

「2階の敵は片付けたが、ボスが来るまで時間が無い。こうなったら最終手段に出るしかない。」と”サン”のイヤホンに聞こえた。”サン”は冷静に周囲を確認しながら答えた。

「そうですね。このままお二人をこの場に置いておく事こそが状況を不利にするばかりですから。荒行事ですぞ致し方がありません。では戻ってきて下さい。」と胸元に手を当て”サン”は答えた。言っている間に”ムーン”は2階から駆け下りて敵を薙ぎ払いながら近づいてきた。

「お二人共下がっていて下さい。これからが僕達の本領発揮です。決して前に出ないで下さい。」と”サン”が凱歌ときなこの前に立つと振り返ると、警告と言わんばかりの鋭い眼差しで言った。

「その通り。これからは”ガーディアン”たる俺達の腕の見せ所ですから。」と”ムーン”が”サン”と反対側、凱歌達と挟む様に立ちながら言った。すると二人は先程の攻める戦い方から守りの戦い方に変った。それはある種カウンターをメインとする自らを盾とする戦い方だった。

凱歌ときなこは二人の戦い方に自分達が介入する事は手助け所か邪魔になる事を感じた。

それは自分達が守られる対象者になっているからである事も分かった。

<あと3分で、お前達の狙うものが再び手の届かない所に戻る！>と”ムーン”が全体に聞こえる様に言った。それから刺客達との睨み合いが始まった…。

「あと1分。そろそろ覚悟を決めますか…。」と”ムーン”が”サン”に言った。

「そうですね。覚悟を決めましょう。お二人共、先にこれからするご無礼を詫びさせていただきます。ですが、分かって頂きたい。それでは失礼します！」と”サン”は言うのと突然きなこを肩に乗せると敵を薙ぎ払いながら外へと走り出した。

「凱歌様、失礼とは思いますがこれもお二人を、ご家族を守る為です！」と”ムーン”も言うのと突然凱歌を肩に乗せ、”サン”の後を追った。

二人は何が起きているのか理解出来ずに簡単に担がれてしまった。

「あと10秒！行きますよ、5、4、3、2、1。ボス受け取って下さい！」と”サン”が言うと二人は凱歌ときなこを道に向かって投げた。

宙を舞う凱歌達を誰かがバイクで掻っ攫う様に受け取り、数メートル走った所で止まった。

「お二人さん迎えに上がったよ！話は後だ。」と明るい声が響いた。

両手に抱えられた状態の凱歌達が抱えている者の顔を見た。そこには笑顔の龍牙が居た。

素早く龍牙はきなこをサイドカーに乗せ、凱歌を後ろに座らせた。

「後の事は任す。円道寺家の皆さんには説明をする必要があるからな。」と龍牙は振り返り”サン”と”ムーン”に言った。

「分かっております。ボスもお気を付けて。こちらは任せて下さい。」と凱歌達を追おうとする敵を

倒しながら”サン”が答えた。それを聞くか聞かないかほどに龍冴をバイクを発進させた。

二人は龍冴が去るのを確認すると、顔を見合わせ店の中に戻っていた。

<凱歌様ときなこ様はもう居ないぞ。そしてお前らの相手は俺達だ！>と”ムーン”は怒鳴り薙ぎ払っていった。

~ 第88章 ~ < プロ >

- 走るバイク -

龍冴は二人にヘルメットを渡しながら説明を始めた。

「家族の事なら心配要らない。彼らは守りのプロだ。しかしすまなかった。

俺達の甘さが原因でこんな事になってしまった。

さっき君達を投げた二人は、念の為に円道寺家の警護に付けておいた俺の部下だ。

前に言ったが俺は二つの部門の指揮を取っている。その内彼らは”死の部門”に所属している。

”死の部門”は大きく分けて四つに分かれる。

一つ目が狙撃をメインとする”スナイパーズ”と呼ばれるチーム。

二つ目が突入などの危険に直接関係する”アタック”と呼ばれるチーム。

三つ目が隠密行動をメインとする”シャドウ”と呼ばれるチーム。

最後が彼らが所属する要人などの警護をする”ガーディアン”と呼ばれるチームだ。

彼らは対象者の護衛の為なら銃弾の前に身を投げ盾となるプロだ。

そして彼らはその中でも”スターコード”という最高名誉を持つ者だ。

しかも”サン”と”ムーン”は”スターコード”の中でNO.1コンビだ。」と龍冴はかなりの高速でバイクを走らせながら言った。そして更に続けた。

「戦い方を見ていて分かったと思うが彼らは護衛が仕事だ。本来自ら進んで戦う事は無い。

攻撃されれば返すという格好だ。しかし、あの状況では本来のやり方では収拾がつかない。

ここで君達をあの場合から離れた本当の理由だが、1211は君達二人を手に入れるのが目的だ。

しかし目的がその場から居なくなれば混乱が生じ、攻撃は緩くなる。そうすれば攻めの戦いに慣れていなくとも対処出来る。だが、これだけは言うておく。彼らは君達二人より、いや下手をすると蒼凱よりも強い。攻めの戦いから離れていたとはいえ、俺が徹底的に守護戦術を教え込んだエリートだ。敵が片付いたら円道寺家の皆さんには施設に来てもらう。

説明をしないとまずいし、今後の事も決める。」と龍冴は二人に言うると突然言葉を止めた。

「今回、1211も本気らしい。付けられていると言うか撃つ気マンマンみたい…。二人とも捕まっている！」と龍冴は言うるとジグザグに走り出した。後ろの車から龍冴達に向けて銃を撃ってきた。

「全くここは日本だぞ…。プロフェッサー、銃の使用許可をくれ。

このままでは無関係な市民に死傷者を出すかもしれない。」と右手でヘルメットに仕込まれているインカムで龍冴は連絡を取っていた。

「分かったがあくまでも追跡と発砲を止める為だぞ。」とプロフェッサーは言った。

「分かっている。凱歌、頭を下げる。」と龍冴は言うると右太ももに付いていた黒金の装飾銃を取り、車を見ずに肩上から発射した。龍冴は着弾音を聞くや「くそ。奴らめ、防弾ガラス仕様の車とは周到な事だ。」と口にした。

凱歌は着弾の瞬間を見ていた。弾丸は正確にフロントガラスに命中したが、防弾ガラスで小さな傷が付いただけだった。

しかし、見もせず正確に命中させるだけでなく、音だけで防弾ガラスである事をバイクの騒音の中で判別した事に驚いた。

「プロフェッサー、貫通弾の仕様許可をくれ。」と龍冴は飛んでくる弾丸を予測する様に避けながら言った。

「1発だけだぞ。恐らくタイヤも防弾仕様のはずじゃ。狙うのはタイヤだ。死人だけは出さな。」とプロフェッサーが言った。

「そんな事は分かっている！ただ交通課からは文句が来るかもな。」と龍冴は言うも銃を1度足のホルダーに仕舞った。

そして胸ポケットから一発の弾を取り出した。それを口に加えると器用に片手でリボルバーを開け弾をセットした。

しかし、突然考えを変え、リボルバーにセットした弾丸を外し、通常の弾丸を使う事にした。

先程とは違い今回は、冷静にタイミングを見計らっていた。

人気の無い路地裏に入ると素早く振り向き、まるで初めて現れた時の禍悪主のような人ならざる者のような冷血な眼差しで車を見つめ引き金を引いた。弾丸は車体を貫通した。

そして突然車は煙を上げ、コントロールを失い止まってしまった。

龍冴はそれを確認すると銃をホルダーにしまい、運転に意識を向けた。

凱歌ときなこは龍冴が何をしたか分からなかった。

「プロフェッサー貫通弾、使わなかった。

それより”ガーディアン”二人から連絡はあったか？」と驚く二人を他所に龍冴は連絡を入れていた。

「先程連絡が入った。ほとんどの敵を片付けたが、一台車がお前達の所に向かった事に気にしていた。」とプロフェッサーは言った。

「そうか。これから戻るが、この騒ぎの収拾はどうするんだ？」

発砲はしてるし、紅龍はグチャグチャだし・・・。」と龍冴は溜息混じれに言った。

「その点は運難コンビが何とかするとして、とりあえず安全に戻ってこい。」とプロフェッサーは言った。

「分かった。二人から連絡があったら、俺達の事と連れて来る事を伝えてくれ。」と龍冴は言うもインカムを切った。

「二人とも大丈夫か？弾は当たってないな。」と龍冴は凱歌達に話し掛けた。

二人とも龍冴の有り得ないと言っていい銃の腕に、生返事しか出来なかった・・・。

「こんな事で冷静さを失ってしまっては困るな・・・。」と龍冴は自分のとんでもない銃の腕が原因で二人が固まっている事に気が付いていなかった。

そうこうしている内に隠し通路に入り、施設に入り口に着いた。

龍冴は面倒くさそうに何重ものロックを外していった。

そうして、中に入り凱歌ときなこを入り口の前で降ろすとバイクを仕舞いに言った。

龍冴が戻ってくる頃、インカムに連絡が入った。

「龍冴、”ガーディアン”が円道寺家の皆さんを連れて、もうすぐ来るぞ。」とプロフェッサーが言った。

「分かった。ここで待つ。」と龍冴は凱歌達を見て答えた。

「もうすぐ、皆さんがここに来る。少し待っててくれ。」と龍冴はやや不安そうに言った。

その龍冴の不安の理由が分からず凱歌ときなこは不安になった。

しかし、凱歌達が考えるようなしっかりとした理由で龍冴は不安な顔をしたのではなかった。

これから会う人に問題があったのである・・・。

- 数分後 -

一台の車が入って来た。ロックを外す為に”サン”が降りてきた。

その姿は少しポロポロになってはいたが問題は無さそうだった。

ロックが開き、車が待っていた龍冴達の前に止まった。

”サン”と”ムーン”は静かに降り、家族の導いた。

「龍冴様、ただいま戻りました。ご命令通り、円道寺家の皆様をお連れしました。」と”サン”と”ムーン”が深々と頭を下げながら報告した。

「ご苦労だった。連絡するまで休憩、報告してくれ。」と龍冴が言うと二人を頭を上げ、円道寺家の方々が降りた車に乗り、車を仕舞いに行った。

龍冴は円道寺家の皆さんを見ると話し始めた。

「先程は我々の不手際で皆様を大変危険な目に合わせてしまい、申し訳ありませんでした。

自己紹介が遅れましたが、私は黒帝龍冴と申します。これまで凱歌ときなこさんを預らせて頂いておりました。本当は私が皆様の元に出向くべきなのですが、なにぶん私そしてこの組織については詳しい事を御教え出来ません。

それに先程のような危険もありますので皆様に来て頂く格好を取らせて頂きました。

しかしこれだけは言えます。我々は皆様の味方である事は事実です。ただ証明するものも無いですから信じて頂くほかありません。これまでの経緯を許す範囲でお話し致しますので、

どうぞ中にお入り下さい。」と龍冴は深々と頭を下げ、中へと導いた。

その案内に従い、雁太郎を筆頭に龍冴の後を追って施設内に入っていた。

~ 第89章 ~ < 検証 >

龍冴はミーティングルームとは異なる会議室のような所に雁太郎達を案内した。

凱歌ときなこが入ろうとした時、龍冴が止めた。

「悪いがここからは俺の仕事だ。

二人ともかすり傷とはいえ、傷の手当てをプロフェッサーからしてもらえ。」と一方的に龍冴は言った。

その言葉に二人が異議を唱えようと口を開き掛けた時、扉を背にする龍冴の後ろに雁太郎が現れた。驚いて龍冴が振り返ると雁太郎が笑顔で言った。

「きなことホイさんも一緒に居てもらえないか？ その方がみんな安心するから。」と

雁太郎が龍冴を見つめ頼んだ。その瞳には強い光が宿っていた。

「ですが…。分かりました。雁太郎様がそうおっしゃるのでしたら…。」

二人とも言っている事と悪い事の境が難しいから俺が一通り話すまでは口出しするなよ。

ま、詳しく話した所で信じられないのが関の山だけど…。」と龍冴は苦笑いにも似た笑みを浮かべた。

そして雁太郎、凱歌、きなこ最後に龍冴の順に室内に入った。

机を挟んで向き合う格好で円道寺家の方々、反対側に龍冴、凱歌、きなこの順で座った。

「それではご説明致します。

まず先程の事ですが、あれは1211の刺客が凱歌ときなこさんを狙って襲撃してきたものです。

我々がもっと用心をしていればこのような危険な目に皆様を巻き込む格好になってしまいました。

誠に申し訳ありませんでした。」と龍冴は再度頭を下げた。

「以前に私は皆様の前に一度だけ現れた事があります。凱歌そっくりの碧河葵という刑事と共に凱歌を止める為に。その時、凱歌ときなこさんの身柄を預らせて頂きました。

その後はこの施設で怪我の治療等をさせて頂きました。そして二人を連れてきた本当の目的ですが、現在我々は1211の殲滅を目的として活動しています。殲滅の為に協力を依頼しました。

協力の見返りとして我々は凱歌の罪の一部免除等を検討しています。

きなこさんもそれを条件として協力して頂いています。

しかし命に関わるような事は我々の全てを掛けて防ぎますのでご心配なさらないで下さい。

先程の襲撃時に皆様を守りました二人ですが、彼らは私の部下です。」と龍牙は神妙な面持ちで話す。胸ポケットからインカムを出し、誰かを呼んでいる様だった。

「もう少しで彼らがここにします。

それと言にくいのですが、今日未明に市江様の病室に銃弾が撃ち込まれました。

ですが、市江様の元にも私の部下を付けておりまして、部下が計画に気づき病室を変更しましたので怪我はありませんでした。

しかしその銃弾は命を狙う物ではありませんでした。あくまでも威嚇でした……。

その為、警備の嚴重に致しました。」とここまで龍牙が話した所で扉をノックする音が聞こえた。

龍牙が扉を開けるとそこには”サン”、”ムーン”と呼ばれた男二人と初めて見る女性二人が入ってきた。

「こちらの二人は見たと思いますが、彼らは”ガーディアン”と呼ばれる要人警護を専門とするプロです。

こちらの女性達も同じ要人警護をしている者です。

これから殲滅活動が終了するまでの間、皆様の安全確保の為に彼ら四人を警護に付けさせて頂きます。現在お店の方も修繕中ですので暫しお待ち下さい。」と龍牙は説明した。

「先程は勝手に店に上がり込んでしまい申し訳ありませんでした。

私は日神陽一と申します。仲間内では”Sun”と呼ばれています。

私は”ガーディアン”歴は5年ほどになります。」と自己紹介を始めた。

日神と名乗った男は年齢28歳ほどに見え、身長が165ほどで中肉中背といった優しい感じの黒髪の男だった。

「先程はどうも。日神とコンビを組んでいる氷月誠也です。

”ガーディアン”歴は日神と同じで5年ほどになります。”Moon”と呼ばれてます。」とややぼっきらぼうに言った。

氷月は日神より少し若い感じで身長180ほどの長身にガッチリとした体型のやや乱暴者といった感じの金髪の男だった。

「初めまして。私は金原美星と申します。

”ガーディアン”歴は先の二人より短い4年弱になります。”Venus(ビーナス)”と呼ばれています。」と丁寧の名乗った。

金原は25歳ほどに見え、身長175ほどですらりと伸びた手足に腰まである美しい黒髪のモデルでもやっぴいけそうな女性だった。

「初めまして。私は炎崎京子です。

”ガーディアン”歴は平原さんと同じ4年ほどになります。金原さんと”ガーディアン”始めた時からコンビを組んでます。

仲間からは”Mars(マーズ)”と呼ばれてます。」と笑顔で言った。

炎崎はまだ10代に見え、身長170ほどの中学生のような明るさがある女の子といった感じだった。しかしこの四人の瞳には強い自信にも似た光が見えた。そして今この時にも隙が見えなかった。

凱歌ときなこはこの四人が只者で無い事を感じ取っていた。そしてもう一人それを感じた者がいた。

それは雁太郎だった。

雁太郎はこの四人だったら安心して生活が出来るし、過去がばれずに済むの思った。

「彼らは”ガーディアン”歴が短い様に聞こえますが、彼らはNO.1とNO.2のコンビです。

日神と炎崎にはお店の方を手伝う格好で皆様の警護致しますので、ガンガン扱き使って頂いて結構です。

氷月と金原は周囲の警護を担当します。

日神と氷月はコックの資格を持つ料理の腕を持ってますから好きな様に使って下さい。

先程のお詫びと近くでの警護の為ですので。

氷月と金原は皆様、周囲には分からない様に警護致します。

時折交代で氷月と金原がお店を手伝うとは思いますが、よろしくお願ひします。」と龍冴は説明を加えた。

「あのさっき、店の中を直しているとか・・・。」と美智が訊いた。

「はい。今修繕作業をしています。終わり次第連絡がありますのでそれまでここでお待ち下さい。」と龍冴が答えた。

「お店綺麗になるんだ。」とはなが嬉しそうに言い、美智と喜んでいた。

その暢気な話に雁太郎ときなこは頭を抱えてしまった。

凱歌と龍冴は笑顔でその光景を見ていた。

はなと美智は店を手伝う事になった四人と打ち解ける様と話をしていた。

雁太郎は凱歌ときなこそして龍冴と話をしていた。

しばらくして龍冴のインカムに連絡が入った。それは修繕が完了した事を伝える物だった。

「皆さんお店の修繕が完了しましたので、日神達が送り届けます。

凱歌ときなこさんにはもうしばらく手伝って頂くのここで別れとなります。」と龍冴は言った。

そして入り口まで凱歌、きなこ、龍冴は送る事にした。

雁太郎達を乗せた車が走り去っていた。

それを見届けると龍冴は二人を医務室に連れていき傷の手当てをした。

#### - ミーティングルーム -

龍冴達が入るとプロフェッサー達が地図を見ながら考え込んでいた。

「どうしたんだ？」と龍冴が地図を覗き込んで驚いた。

それは市江が入院して病院付近の地図だった。数ヶ所ペンで印が付いていた。

「お前ら”スナイパーズ・ネスト”を探してたのか？」

それならガラスに付いて弾痕、床に撃ち込まれた弾などの角度からここだ。」と龍冴は地図にある一つのビルに印を付けた。

「しかし、これではお前ぐらいしか出来ないじゃないか。」とプロフェッサーが言った。

凱歌ときなこはそのビルの位置に驚いた。

ビルの屋上から病室まで優に500mは離れていた。しかも狙撃時刻は日の出前。

そこらのスナイパーに出来るものではなかった。

「その通り。だが、残された痕跡はここを示している。そこ以外にこの角度は有り得ない。

だとするとそれほど腕を持つスナイパーがこの日本にいる事になる。

しかも敢えて市江さんを殺せるのに殺さなかった。恐らく最終警告のつもりだろう。ふざけてる。」と

龍牙は皆が集まる机から離れ、パソコンで検索を始めた。

「何してるんですか？」と蒼凱が訊くと「あんな事が出来るスナイパーなんてのは数えるほどしか居ない。」と龍牙が答えた。

少しして龍牙が「やっぱり日本には来ていない…。となるとあの赤髪の…。」とぼやいた。

龍牙が知っている限りではこの狙撃が出来る奴は本当に数えるほどしか居ない。

その為、そいつらの所在を確かめていた。しかし、誰も日本に入った形跡が無かったのである。

「あの赤髪って誰ですか？」と蒼凱が訊いた。

「あぁ。1211の立てこもり事件があったらだろう。その時に俺を狙ったスナイパーだ。

アイツなら出来るかもしれない…。それだけ正確に俺を狙った。

その上、アイツに関して何の情報も無いが、1211に関係している事は確かだ。」と龍牙は考えながら言った。

龍牙は凱歌ときなこに今日1日体調を整える名目で休みとした。

しかし、本当は四天王全員が報告書の作成、現場検証などの捜査や運難コンピに怒られていた為に、鍛錬をする事が出来なかったのである。

ただこの休みは後々有難い物になるのであった…。

- 続く